



**Data**

監督: ジェニー・シュン  
 監督・撮影: クリストファー・ドイル

出演: オダギリジョー/アンジェラ・ユン/マイケル・ニン/トニー・ウー/サム・リヨン/ランヤ・リー

### ■■■ショートコメント■■■

◆オーストラリア出身の映画カメラマン、クリストファー・ドイルといえば、『恋する惑星 (94年) (『シネマ2』232頁、『シネマ5』257頁)、『楽園の瑕 (94年) (『シネマ5』231頁)、『花様年華 (00年) (『シネマ2』231頁、『シネマ5』250頁)、『ブエノスアイレス (97年) (『シネマ5』234頁)、『2046 (04年) (『シネマ5』359頁)、『海洋天堂 (10年) (『シネマ27』219頁、『シネマ34』335頁) 等の撮影で超有名。日本でいうなら、さしずめ『八甲田山 (77年)、『単騎、千里を走る。』 (05年) (『シネマ17』233頁) 等のカメラマンとして名を馳せ、近時は、『劔岳 点の記 (08年) (『シネマ22』250頁)、『春を背負って』 (14年) (『シネマ33』124頁)、散り椿 (18年) (『シネマ42』未掲載) の監督をしている木村大作のような存在だ。

チラシでも「90年代香港映画の興奮よ、ふたたび—世界を熱狂させてきた撮影の巨匠クリストファー・ドイル、至宝の逸品がここに!」「数々の映画祭が心酔—撮影の巨匠クリストファー・ドイル、その真骨頂!」とビッグネームのクリストファー・ドイルを前面に押し出して宣伝しているが、これはある意味で当然。しかして、本作のテーマは? 物語は?

◆ 他方、本作が長編映画デビュー作になるのが、香港出身のジェニー・シュンで、共同監督を兼ねたクリストファー・ドイルは“パートナー”らしい。私はこの監督の名前を全く知らなかったがさて・・・?

◆ 12月13日付日経新聞「文化往来」は、小さい記事ながら要領よく本作を紹介している。それによれば、本作は「シュンが故郷を思い、書き留めた物語が発端だった」らしい。そして、本作には日本人俳優のオダギリジョーが出演し英語でセリフをしゃべっているが、本作のヒロイン役となる、香港で最後に残ったという漁村に暮らす美しい少女 (アンジェラ・ユン) はシュン自身らしい。

村の廃墟に住みついたオダギリジョー演じる旅人が、その漁村に暮らす少女と出会う中

で展開していく幻想的な風景と風情が本作の“売り”だが、幻想的な反面、ワケがわからない感も……。また、本作のチラシには「実力派オダギリジョー×次世代ミュージシャンジュラ・ユンが、香港を舞台に織りなす幻想と耽美の世界」と書かれた文字が躍り、ストーリーでは「陽に当たることのできない少女、どこからともなくやってきた異邦人の男。それは、本当の居場所、本当の自分に気づかせてくれた唯一無二の出会い」と紹介されているが、さて……？

◆中国の深圳は1978年から始まった、鄧小平による改革開放政策と1992年の「南巡講話」によってひなびた漁村から高層ビルが樹立する国際金融都市に生まれ変わったが、それは香港も同じ。あの狭い地域に超高層ビルが林立する香港も、250年前は漁村の集合体のような町だったらしい。

しかして、本作冒頭のアナレーションで紹介される、香港に残った漁村は実はジェニー・シュン監督がイメージする香港そのもの……？そして、透き通るような白い肌を持ち、日光にあたると死んでしまう病気だという、本作の美しいヒロインはシュン監督自身の投影……？

◆沖縄では普天間飛行場が辺野古に移設されることに伴って、美しい海が失われることが危惧されているが、開発と環境保全は常に矛盾、対立する概念だ。しかして、本作に見る、少女と旅人が住む香港で最後に残った漁村を一大リゾート地に変えようとする開発業者たちのたくらみとは？そして、その対立はいかなる展開を見せ、いかなる結末を……？

2019（平成31）年1月10日記